

森鷗外 「山椒大夫・高瀬舟・阿部一族」 角川文庫

担当 加賀谷亜矢

森鷗外の歴史小説短編集をとり上げました。

数年前に読んだ「山椒大夫」と「最後の一句」を読み直したいと思ったからです。それぞれの主人公「安寿」「いち」という二人の少女は家族のために身を捧げようとしますが、その揺るぎない態度が強く心に残っていたのです。

本短編集は9編から成り、「山椒大夫」「じいさんばあさん」「最後の一句」「高瀬舟」「魚玄機」「寒山拾得」「興津弥五右衛門の遺書」「阿部一族」「佐橋甚五郎」の順に収録されています。

鷗外は漱石と並び立つ文豪ですが、軍医総監にまで上り詰めた陸軍の軍医でもありました。歴史小説を書いたのは、その六十年の生涯の晩年です。明治天皇崩御の際、乃木希典夫妻が殉死したことに衝撃を受け、わずか数日間で書き上げたという「興津弥五右衛門の遺書」が最初と言われています。

私は9つの作品を読み、鷗外の女性像、殉死を巡る明暗、そして鷗外はなぜ歴史小説を書き続けたのか、の三点に興味を持ちました。各作品への感想と、その三点について考えたことを記したいと思います。

「山椒大夫」初出: 大正四年1月「中央公論」

典拠: さんせう太夫(説教節...中世末~近世の語り物文芸 仏法を説いて衆生を導く。)

★筑紫に行ったまま帰らぬ父を探しに、母、女中に連れられて安寿と厨子王姉弟は旅に出る。途中、二人と母は別れ別れに人買いに買われてしまう。二人は奴婢としての辛い暮らしを送るが、ある日お守りの地蔵様の不思議な夢を見て、安寿は密かに弟を逃がすと決心。実行の後安寿は自害、厨子王は寺に匿われながら逃げて都に登り身分を回復、母と再会する。

感想 地蔵様の夢を境に、安寿は物を言わなくなり考え事ばかりするようになる。しかし弟を逃亡させるチャンスをとらえた瞬間様子は一変、生き生きと話し出す。輝くような喜びを顔に湛えながら厨子王に計画を説明するのだ。その一連の描写が、以前読んだ時と同様最も印象に残った。私はそこに、15才の安寿が、家のために自分が果たす使命は何か一生懸命考えたこと、また、今こそ使命を果たそうという昂揚感でいっぱいになっていることを感じる。

典拠とされる「さんせう大夫」では、安寿は大夫の元に戻り、厨子王を逃がしたことを最後まで白状しないため残忍な方法で責め殺されるが、「山椒大夫」の安寿は厨子王を逃がした直後自ら入水している。支配者の残虐性より、安寿の意志的な像に重きを置いていると思う。

その自ら考え行動を起こす安寿の像は、掟は掟と疑わず、人買いに言われるままに騙されて行った母と対照的だ。鷗外は安寿を、自ら決意し行動した女性として描いたのではないだろうか。

と同時に、その決意の元が仏の加護への確信であったことが随所で強調されていると思う。安寿の喜びの表情は「毫光のさすような喜を額に湛えて」と表され、「物に憑かれたように、聡く賢くなっている」安寿の言葉に、厨子王は「まるで神様か仏様が仰るようです」と逃亡の決意を固めて行くのだ。そして都に上った厨子王が地蔵様を見せて身分を証明したり、母が見つからないのは自分の足で探さず役人任せにしているのを神仏が憎んだからではないかと考えたりするのは、仏の導きというものを感じさせる。

また、国守となった厨子王が任国で人身売買を禁ずるのも印象に残る点である。山椒大夫の奴婢達も解放され給料をもらう立場になる。それを大夫は不服に思うが、結果的に労働の質が向上し大夫一家はますます富み栄える。「さんせう大夫」では厨子王は報復に大夫を惨殺しており、因

果応報を感じさせるが、それに比べ随分近代的であるし、安寿の献身がもたらす恩恵の大きさも感じる。

作品の舞台は海、浜、山と様々だが、自然描写が巧みで景色が思い浮かぶようだった。冒頭母が見る紅葉、厨子王を逃がす山中で安寿が見る董なども、彩りや季節感を添えている。鷗外は牧野富太郎とも親交があり、著作には多くの植物が登場するそうだ。

文章にはリズムがあると思う。海上で人買いに買われて行く場面、姉弟が大夫に酷い罰を与えられる夢の場面など、短い文で畳み掛ける調子に臨場感が出ていると思った。

参考 「歴史其の儘歴史離れ」 森鷗外

「じいさんばあさん」 初出: 大正四年 9 月「新小説」

典拠: 「一話一言」大田南畝 江戸後期の随筆集。筆者が見聞した風俗、流行、事件、天災、幕府の文書などを書き留めた物。大田南畝は狂歌師、戯作者。有能な幕臣でもあった。

★るんが結婚し身籠もった頃、夫伊織が生来の癩癩持ちのせいで事件を起こし流罪となる。夫を深く愛していたるんは、伊織の祖母、病にかかった幼い息子を看取ると、生涯奥女中として身を立てると決心。黒田家で三十一年間を勤め上げ隠居していたところに、夫伊織が赦されて帰って来た。二人は三十七年振りに再会、まるで新婚の夫婦のように仲睦まじく暮らし始める。るんの貞節に將軍から破格の褒美があった。

感想 一生の武家奉公を思い立った時、るんは世話になっている人、親類などに奉公先を探してほしいと頼む。結婚の遅かったるんに再婚の道があったかは分からないが、自分で決断、行動した人だと思った。

黒田家で一目で気に入られ奥女中になったるんは、四代の奥方に仕え表使格に進み、終身二人扶持をもらうまでになる。そこからは自分の決めた道を誠実に歩んだことが窺える。

そんな意志的な人物像は、借財をした相手である同輩を宴に招かなかつたり、その同輩の挑発に刀を抜いてしまったりする夫と対照的であった。

晩年のるんに最愛の夫と過ごす日々が訪れ読んでいて嬉しく思う一方、夫そしてその家は、るんに守られたのだと思った。

この話は歌舞伎の人気演目になり、仁左衛門と玉三郎などが演じている。

「最後の一句」 初出: 大正四年 10 月「中央公論」

典拠: 「一話一言」大田南畝

★罪を犯し翌朝処刑が決まった父の助命を、いちが奉行所に願い出る。自分達子供の命を代わりに召して下さいというのだ。一晩かかって書き上げた願書を持ち、追い返されそうになってもひるまない。とうとう白州で取り調べられることになった時、いちが放った一言「お上の事には間違はございますまいから」は、居合わせた役人の胸を貫いた。

感想 16才のいちの一貫した揺るぎなさが、以前読んだ時と同様不思議であった。

書いたこともない願書を、ひらがなで何度も書き直しながら作り上げる。霜の降りる暁にたどり着いた奉行所で、子供の言うことなどお奉行様は聞かぬと門番に拒まれても、門前に座り込みをする。開門と同時に堂々と進み入り、うずくまって礼をして与力に願書を差し出す。「お願を聞いて戴くまでは、どうしても帰らない積りでございます」と断固とした決心を見せている。祖母が父の処刑を母に知らせに来たのを立ち聞きした晩から、次の日までのこと、つまり父が死ぬとわかって直後の行動なのだ。これ程の決意が生まれる訳が、今一つわからない。

いちを長女とする子供たちは、父は遠いところに行ったと言い聞かせられ二年を過ごしている。その二年の間、母が「悔恨と悲痛との外に、何物をも心に受け入れることの出来なくなった」様子で嘆き暮らすのと対照的に、いちが14才から16才という年齢のこの時期に、長子としての自覚を固く身につけたのだろうか。

与力から話を聞いた奉行は願書を内見するが、「条理が善く整っていて、大人でもこれだけの短文に、これだけの事柄を書くのは、容易であるまい」と驚く。父の代わりに自分達子供を殺して下さい、ただし父が跡取りに貰い受けた弟だけは、実子でないから殺さないで下さいという内容だ。誰か大人が書かせたのではあるまいか、と疑った奉行は、いったん菓子でも遣ってすかして返せと与力に言うが、いちが動かない。やっとのことで追い返した役人たちに「余程情の剛い娘」と強い印象を残す。

翌日の取り調べで、いちが前日来の経緯を「些の臆する気色もなしに」はっきり答え、大人に相談したりしていないと言う。申し立てに「間違」があつて嘘をついているなら、白状するまで責めさせるぞ、と責め道具を見せても「少しもたゆたわずに」間違いはないと静かに答える。

これらの一貫した、冷徹なまでの落ち着きはどこから来るのだろうか？頼りない母に代わって家を守ろうとしたというだけでは、腑に落ちない。

いちがさらに、もし願いが聞き届けられればすぐに殺され、父に会うことは叶わぬと言う奉行に、構わないと答え「お上の事には間違はございますまいから」とひと言付け足す。典拠とされる江戸時代の随筆にはない、鷗外のオリジナルである。この裁判制度にこそ、間違いなどございませんでしょうね、ということだろうか。

その一句は言葉を交わした奉行だけでなく、その場に居た役人一同の胸をも刺したとあるが、ここで鷗外は不思議な記述をしている。当時の徳川家の役人は「マルチリウム」という洋語も知らず、当時の辞書に「献身」という訳語もなかったのだから、老若男女を問わず人間の精神にいちに現れたような作用があるのを知らなかったのは無理もない、というのだ。

その作用とは、「献身」というより「献身の中に潜む反抗の鋒」なのだと思う。「マルチリウム」は教会ラテン語で巻末の注釈には「献身」「殉教」とあるが、元々「証明」「証言」「証人」という意味があるそうだ。ここから感じるのは、びくとも動かない制度に対する、何かを尊ぶ者の強さである。いちの「父」「家」に対する思いは、信仰に近かったということなのだろうか。

この物語は、制度というものへの痛烈な批判とされることも多い。役人たちは決まった事は決まった事として処理しようとし、思わぬ事態(いちの申し立てや反抗)に対しては、上に聞こうとしている。いったん「江戸へ伺中日述」となったいちの願意は、天皇の代替わりに伴い御赦免、つまり願意が吟味された訳ではなく、期せずして成就した。制度とは何なのか考えさせられる。

参考 「元文三年大阪堀江橋近辺かつらや太郎兵衛事」

「高瀬舟」 初出: 大正五年1月「中央公論」

※「附高瀬舟縁起」大正五年1月「心の花」

典拠: 「翁草」神沢杜口(江戸後期の随筆)

★同心庄兵衛は、弟殺しの罪を犯した喜助を高瀬舟で護送する中、これまでの罪人とはあまりに違う軽やかで明るい様子を不審に思う。その訳を尋ねると、働いても働いても金に困り居場所も定まらなかったのに、罪人となってからは住む場所も食べ物も用意してもらえる。あげく島に行くにあたり二百文もの金をもらえ、ありがたいのだと答える。弟を殺したのは、死にきれず苦しんでいたのを楽にしてやったということだった。

感想 鷗外が「附高瀬舟縁起」で述べているように、「銭を持ったことのない人の銭を持った喜は、銭の多少には関せない」から、喜助は二百文を財産として喜んだ。そんな喜助に我が身を引き比べた庄兵衛と同様、満足の基準というものを考えさせられた。

庄兵衛は、自らの生計も結局は給与を右から左へ人手に渡しているに過ぎず喜助と何も変わらない、違うのはその桁だけだと考える。だが「いかに桁を違えて考えて見ても、不思議なのは喜助の慾のないこと、足ることを知っていることである」と思う。人の欲には際限がなく踏み止まらないもので、自分も大方出納が合う自分の暮らしに満足を感じたことはなく、どこか先々を不安に思っている。だが喜助は「踏み止まって見せてくれ」といると庄兵衛は驚異の目を瞠る。「喜助の頭から毫光がさすように」すら感じるのだ。

喜助が「踏み止まって」いるのは、「失う」という感覚が希薄だったからだと思う。

弟の安楽死について、私は喜助が「弟の目」から思いを全身で感じ取ろうとして判断を決めたと考えている。弟の目を読む描写は、何をすることも一緒にして来た二人だけの家族にしかわからない対話を感じさせる。実は喜助にとって唯一「失う」のが恐ろしかったのは、かけがえのない弟だったのではないだろうか。もう「失う」ものはなかったのである。

喜助の話聞き庄兵衛は、果たして人殺しなのかと疑問に思う。その疑問は容易には解けず、いろいろ考えてみた末に「オオトリテエ」(権威)に従うよりない、「お奉行様の判断を、其儘自分の判断にしようと思った」。だがそうは思ってもやはり腑に落ちないものが残り「なんだかお奉行様に聞いて見たくてならな」くなる。ギリギリの状況で一つの判断を選択した喜助と対照的な態度に映った。

喜助の軽やかで楽しげな様子から、私は彼が心の平安を得たと感じた。だが「どうしてあんな事が出来たかと、自分ながら不思議でなりませぬ」と言い視線を落としてみている。平安を得たかどうかはわからない。ただ、たった一つの大切な存在を大切にし通したという感覚があったのではないかと思う。

「次第に更けて行く朧夜に、沈黙の人二人を載せた高瀬舟は、黒い水の面をすべって行った」と物語は結ばれる。価値観を揺さぶられた庄兵衛の深い物思いが伝わって来るように感じた。

「魚玄機」初出: 大正四年七月「中央公論」

典拠: 漢詩「唐女郎魚玄機詩」「温飛興詩集」他

★唐に魚玄機という美貌の詩人がいた。幼い頃より非凡の詩の才と類いまれなる美貌は、世の人の口を上った。魚玄機は温という師を得たが、男子と違い才能を世に活かす事が出来ないのを嘆いた。ある時裕福な美男の側室となるが間もなく別れ、道教の寺院に入る。ここで出会った恋人を巡り殺人を犯し、処刑されてしまう。

感想 才能と美貌を御し切れなかった女性の不幸を感じる。元々の才知に加え当代随一の詩人温を師に迎えてから、玄機は「一面には典籍の涉獵に努力し、一面には字句の錘鍊に苦心して、殆寝食を忘れる程」詩に没頭する。と同時に名声をも求めるようになり「女子の形骸を以て男子の心情を有していた」と描かれる。

その一方で、美しい玄機に男たちが寄って来る。そして玄機には裕福な美男にときめいてしまうところもある。それは「蔓草が木の幹に纏い附こうとするような心」と表されている。若い娘がそんなときめきを覚えるのは自然なことだと思う。だがいざその美男の側室となると相手を受け入れる事が出来ず、結婚生活は破綻してしまう。恋に恋していたということだと思う。

美男は落胆のまま玄機を手放すが、その際実家に戻るのを拒む玄機を知己である道士に託す。道教の寺院に入り道書を授けられると、勉学を好む玄機は嬉々としてそれを読む。だがある時から、書を求めやって来る客の一人、陳という男との恋愛にのめり込んでしまう。サロンのようになっていた玄機の部屋からは客が遠ざけられ、二人は密会を繰り返す。そしてある日、玄機は若い女の奴婢と陳の関係を疑い奴婢を殺してしまうのだ。

疑念はおそらく玄機の妄想で、「猜疑は次第に深くなり、忿恨は次第に盛んになった」と嫉妬に狂う様子、「なぜ白状しないか」と叫んで女の首を絞める様子には狂気を感じる。書を求める客は絶えず名声も高まっていたのに、それはもはや十分な満足にはならなかったのだろうか。

師の温が非凡な詩の才を持ちながら世に重用されない理由に人格面が挙げられていたが、同じく非凡な才を持った魚玄機の破滅は恋愛がもたらしたものだと思う。魚玄機が望んだ男子のような活躍が叶えられていれば、破滅する程のめり込んだりしなかったのだろうか。

鷗外は樋口一葉や平塚らいてう、与謝野晶子といった「新しい女」を高く評価していたという。「魚玄機」は、平塚らいてうになぞらえて書いたという説がある。それがどういったことなのか、いずれ調べてみたいと思っている。

「寒山拾得」初出: 大正五年 1 月「新小説」

※「附寒山拾得縁起」大正五年 1 月「心の花」

典拠:「寒山詩集序」? 寒山、拾得は唐代中期の高僧、詩人。奇行が多いことでも知られる。

寒山が文殊菩薩(知恵)、拾得が普賢菩薩(慈悲)の生まれ変わりと言われる。

★唐の頃、閻猛胤という役人が主簿(県知事位の地位)になり任地に赴いた。人々が自分に平伏するのが得意でたまらない。出立の際頭痛を治してくれた乞食坊主を何となく偉い人に思い、任地には会ってためになるような偉い人はいるかと聞く。寒山、拾得の二人の僧を教えてもらい、寺に行き二人を見つけると、閻は肩書きを並べ立てて挨拶をする。みすぼらしい二人は笑って駆け出し、閻は僧たちに囲まれてしまう。

感想 人から教えられたものに「盲目の尊敬」を起こし、地方官としての権威を持ちつつ賢者を訪ねることを「手柄のように」思う閻の姿が滑稽だった。「盲目の尊敬」は、「道とか宗教とかに対する態度に三通りある」という叙述の中に出てくる。

「三通り」とは、一つに「自分の職業に気を取られ～道と云うものを顧みない～無頓着な人」、二つ目に「専念に道を求めて、万事を投げ打つ」あるいは「日々の務は怠らずに、絶えず道に志」す「道を求める人」。三つ目は、その中間の「道と云うものの存在を客観的に認めていて、それに対して無頓着だと云うわけでもなく、さればと云って自ら進んで道を求めるでもない」人で、そういう人に、自分のわからないもの、会得出来ないものに対する「盲目の尊敬」が生ずるのだと言う。

その記述をととても面白く感じた。滑稽と思ったが、閻のようなタイプは多いかも知れない。お正月に急に神社に詣でて、清々しい気分にも浸ることも同じようなことかも知れない。

鷗外の文には短いものが多いと感じるが、乞食坊主にまじないをさせる時の「水が来た。」など、ごく短い文で場面の進行を表すのがうまいと思った。

ただ内容に少しわからないところがあった。最後、寒山と拾得に逃げられた閻の周りに「僧がそろそろと来てたかった」とあるが、どういうことなのだろう。僧たちは肩書きを並べ立てた閻に、何かしらの恩恵を受けたかったのだろうか。

「附寒山拾得縁起」で、子供に「寒山詩」の内容を知りたいと言われてこの話を書いたところ、寒山が文殊で拾得が普賢というのがわからない、と問われ答えに窮したと言っている。色々説明したが子供は理解せず、とうとう「実はパパアも文殊なのだが、まだ誰も拝みにこないのだよ。」と言ったそうだ。その意味もよくわからなかった。

「興津弥五右衛門の遺書」初出: 大正元年 10 月「中央公論」

典拠:「翁草」神沢杜口(江戸後期の随筆)

★主君細川忠興の命令を巡り、弥五右衛門は相方を討ってしまう。切腹を申し出るが忠興は弥五右衛門の行動を評価、その後も重用する。忠興逝去の時、「再造の大恩」を感じていた弥五右衛門は直ちに切腹を願うが江戸詰のため叶わない。ようやく当代光尚に許され、晴れ晴れしい設えの中念願の切腹をする。

感想 この作品は、細川忠興の墓前に於いて切腹することが決まった弥五右衛門が、子孫のためにその顛末を書き残す遺書、そして切腹の日の様子や興津家の家系を述べた部分から成っている。遺書では忠興への「大恩」が詳細に語られ、子々孫々に伝えたい思いの強さが伝わってくる。

茶事に用いる「珍らしき品」を求めて参れという忠興の命を果たすべく、反対する同輩を討ってまで「伽羅の香木」の本木を手に入れた弥五右衛門。同輩は香木は武具と違い「無用の翫物」

「高が四疊半の炉にくべらるる木の切れ」なのだから大枚をはたく価値などない、末木で十分だと主張したが、弥五右衛門は、細川家は「代々武道の御心掛深くおわしまし、歌道茶事迄も堪能に為渡らるるが、天下に比類なき所ならずや」と激しく反論し争いになったのだ。

弥五右衛門は切腹を申し出るが「斯程の品を求め帰り候事天晴なり」と忠興が高く評価し助命してくれたのを、「再造の大恩」というのである。

弥五右衛門はまず主君の命令を第一に考えたのだろうが、同輩が言うようにいかに命令といえども「臣下として諫め止めもうすべき」局面もあろう。「茶儀は無用の虚礼なりと申さば、国家の大札、先祖の祭祀も総て虚礼なるべし」とする弥五右衛門は「総て功利の念を以て物を視候わば、世の中に尊き物は無くなるべし」とする忠興と価値観が一致したからこそ、評価されたのだと思う。

買った香木が名香として帝にも賞賛され細川家の誉れとなったことにも、弥五右衛門の幸運を感じる。主君の覚え目出たく、殉死を純粋に望み、それが叶えられることに安堵する...弥五右衛門は幸せな臣下だと思ふし、主君との信頼関係の強さも感じる。

ただ、切腹の場所が「いかにも晴れがましく」設えられ、見物人も多くいたという様子は何だか舞台めいていて、少し気味の悪さも感じた。

「阿部一族」初出：大正二年 1 月「中央公論」

典拠：「阿部茶事談」江戸中期に、肥後藩の重職阿部一族が上意討ちで破滅した顛末が創作も交えて書かれている。

★肥後熊本藩主細川忠利が病に罹り死期を悟った時、阿部弥一右衛門はひとり殉死を許されなかった。忠利は昔からなぜか、有能な家臣である弥一右衛門を好かなかったのだ。周囲の目を堪えて生きるか、許しのない切腹(犬死)をするか悩むが、命が惜しい男と言われ切腹を決意。残された家族は家格を下げられ、長男の振舞を責められ討手がかかり一族は滅びてしまう。

感想 殉死は主君である殿様の許しがなければ認められず、たとえどんなに殿様のことを思って後を追っても、許しのない死は殉死と認められない犬死であるということを初めて知った。この話は、許しを得た例を上げた後、許されなかった家臣の悲劇を描いている。「此男程精勤するものは無く、万事に気が附いて、手ばかりが無い」という有能さにも拘わらず、細川忠利に疎んじられた阿部弥一右衛門である。早くから忠利に仕え、子供たちも軍功を立てていた家臣であったのに、忠利は彼がまだ小姓の頃から「此男の顔を見ると、反対したくな」る癖があった。なぜか虫の好かない相手だったのだ。

殉死の許しを得た十八人はそれぞれ忠利が親しく使っていた家臣だが、弱冠 17 才の取り立てて功もない者もいた。忠利が「始終目を掛けて側近く使」っていた、つまりお気に入りだったのだ。また、犬牽きといった軽い身分の者もいた。彼らの残された家族は優待を受け、生活を保障されている。

そんな例と比べ弥一右衛門は本当に気の毒だと思った。家中には殉死するのが当然と思われ、自分も当然に思い懇願しても、最後まで許しをもらえなかった。この上は犬死と知って切腹するか、浪人して熊本を去るかしかないと考えたものの、「己は己だ。～主の気に入らぬからと云って、立場が無くなるはずは無い」と考え忠利の死後も勤め続ける。しかし「命の惜しい男」という周囲の中傷を彼の誇りは許さず、切腹を決意する。残された家族は針の筵に置かれたような日々を送り、長男の奇行を理由に討手がかかって一族は滅亡するのである。

確かに弥一右衛門には「どこかに人と親しみ難い処」があったというが、これまでお願い事をした事もなく「生涯唯一の願でござります」と懇願する家臣に、最後まで情をかけられなかったものかと思ってしまう。許しを与えなければ名誉が汚されるのはわかっていたのだから。

現に十八人の家臣たちに許しを与えた際の忠利の心中に、そのことは述べられている。忠臣たちを自分と共に死なせるのはしのびなく、また嫡男のために残しておきたくもある。だが彼らの名誉を考え葛藤の末決断したというのである。

葛藤といえば、先に挙げた若侍の、殉死に対する複雑な心中も描かれていた。「自分の発意」と人から「余儀なくせられている」心持ちの両面があったという。細かな心理描写もこの物語の特徴だと思う。

弥一右衛門の残された子供達が冷遇され過ぎたことにも悲運を感じる。長男の奇行も、イレギュラーな跡目相続に端を発しているのだ。一族は邸に立てこもり討手と戦った末滅亡するが、討手の中で一番の手柄を立てたのが、普段から阿部家と懇意にしていた家臣であったことも物語に哀しさを増している。阿部家の悲運に心痛を極めながら「情は情、義は義である」というところに、武士がいかに名を重んじたのかを感じた。

殉死制度を巡り、「興津弥五右衛門の遺書」と対照的な物語であった。主君との関係性が大きく作用し、明暗を分けたのだと思った。

読者会では、二つの物語を通じ「制度」への批判や、主君の言動によって波紋が広がって行くのが感じられること、また両者に多くの武士の名前が連ねられていることから、彼らがいかに名前を重んじたか、そしてある歴史の前後にたくさんの方がいることがわかる、という貴重なご感想をいただいた。

「佐橋甚五郎」初出：大正二年4月「中央公論」

典拠：「続武家閑話」(「通航一覽」江戸幕府が欧米諸国接近の圧力を感じる中で、幕初以来の外国応接の歴史を明らかにするために編纂した外交史料集)

★徳川の始め、朝鮮からの使が復活した。謁見した家康は、上級役人の一人喬兪知を佐橋甚五郎だと見咎める。甚五郎は昔嫡男信康の小姓で、事件を起こし逐電したのを家康が条件付で助命してやった者である。甘利を討てというその条件を見事に果たした甚五郎は家康に召し抱えられ、その後軍功を立てるが、家康に評価されなかった。自分に対する家康の心中を察した甚五郎は、また行方をくらました。喬兪知がその甚五郎なのか誰にも分からない。

感想 甚五郎は「口に出して言い付けられぬうちに、何の用事でも果すような」若者であり、「武芸は同じ年頃の同輩に、傍に寄り附く者も無い程」、さらに「遊芸が巧者で、殊に笛を上手に吹いた」とある。伶俐で武芸に秀でた若侍だった訳だ。そんな甚五郎が同輩と賭けをし、同輩が約束を守らなかったため怒って殺してしまい、行方をくらました。

それが後に家康に助命されたのは、難敵甘利を討つという条件をやすやすと果たしたからで、その非凡さがわかる。が、約束通り助命して召し出しても家康は甘利のことに一切触れない。その後軍功を挙げた時も、加増はしたものの賞美の詞をかけなかった。

そして「あれは手放しては使えど無い」という家康の言葉を聞いて、「ふんと鼻から息を漏らして軽く頷」き甚五郎は再び姿を消した。家康は自分を信じていないと確信し、見切りをつけたのだろう。

だがその後朝鮮に渡り、高官に上り詰めるなどということが可能だったのだろうか。「平生何事か言い出すと跡へ引かぬ」甚五郎であり、甘利も討ち果たしている。稀有なことを成し遂げたのかも知れない。物語の最後に、佐橋家に上等の人参が非常に多くあったと書かれているのも喬兪知＝甚五郎を感じさせる。

喬兪知＝甚五郎を主張したのは家康一人である。物語はあくまで確かな事は誰にもわからないとしている。もし家康の主張通りであれば、老いても家康の目は誰よりも鋭かったといえるだろう。違うのであれば、甚五郎はそれほど忘れ難い相手、いつかどこからか甘利に対してのように

「寝首を搔き」に忍び寄ってくる相手としてずっと家康の意識下にあり、顔の似た相手に過剰な反応を起こしたのだろうか。

ミステリーじみた面白さのある物語で、甘利殺害の場面には畳み掛ける短文の調子に緊迫感があった。また、喬僉知=甚五郎であれば、甚五郎は名前を捨てている。興津弥五右衛門や阿部弥一右衛門とは全く異質な人物だと思った。

☆最後に～鷗外の女性像、殉死を巡る明暗、鷗外はなぜ歴史小説を書き続けたのか

「山椒大夫」の安寿、「じいさんばあさん」のるん、「最後の一句」のいちの行動とその結果を見れば、鷗外は自ら考え自ら行動する女性を評価していると言ってよいと思います。また「興津弥五右衛門の遺書」と「阿部一族」からは、主君との関係性が武士の世界でいかに命運を左右するかがわかりました。

鷗外はなぜ歴史小説を書き続けたのか、これについてはそもそもこの9編しか読んでいないしよくわかりません。ただ、私はこの作品群に「選択」というキーワードがあるかも知れないと思いました。自分で選択した人—安寿、るん、いち、喜助、弥五右衛門、弥一右衛門、甚五郎、自分の選択というものが感じられない人—魚玄機、間と考えました。選択の大本には、何を大切に思うのかということがあると思います。自ら選択した人たちには、それぞれに選択の基準として確かなものがあつた、それを描いておきたかつたということがあるかも知れません。明治という時代が終わりを告げた時、鷗外は何かその必要性を感じたのだろうか、、、そんなことを考えました。